

日本王朝と日前の対立

●女王トヨ

森厳きわまる五十鈴宮には木漏れ日しか差し込まなかったことで、ヒミコは日増しに体調を崩した。それから半年と経たない内に、倭姫や近習らに見守られながら八十余年の生涯を閉じた。饒速日は直ちに臣下らと伊勢に馳せ参じ、ヒミコに今上の別れを告げた。その場に居合わせた者は皆、纏向に立派な御陵を造り、日々これを仰ぎ見ることで行きたいと願った。

倭姫も従前どおり五十鈴宮に住み続けて、天叢雲劍・真経津鏡を奉じながら天照大神とヒミコをお祀りしたいと請うた。以後、伊勢では天照大(御)神二柱が祀られることになる。

饒速日は纏向のホケノ山古墳にヒミコの亡骸を一時的に祭り納めると、日本朝の体制固めを急ぐ一方、旧上之宮真南に径百余歩(一五〇余歩)の円形壇を築かせていた。それが完成したところで、円壇中央にモガリ屋を建ててヒミコの亡骸をその中に移し祭った。と同時に、女王に忠義立てして遺言遵守を叫び続ける百余人を片っ端から捕えてモガリ屋周辺に生き埋めにした。この時の彼は、内々にこう決意していたに相違ない。

「魏の役人どもが帰国したなら、ヒミコの唱えてきた仏塔のごとく、五段重ねの石積み古墳に造り替えてみせよう」

この考えの下で、ヒミコ率いた天(厳)を日本朝にそっくり組み入れた。それと並行して、鉄器づくりの工人らに十握剣に似せた鉄剣を参列者の数だけ造るように命じた。

月日がたつて、旧上之宮東の珠城山丘陵たまきに待ちに待った即位式場が完成した。彼はその晴れの舞台で女王から賜った天照大神之御魂の八咫鏡・十



握劍を神璽としてかざしながら、日本朝の開朝を宣言すると、独り倭王の座に居座っていた。つまり、自分に都合の良い遺言だけを守り、天火明遺児の豊鍬入姫を女王に立てなかったのだ。その後の宴席で、彼は居並ぶ豪族らに鉄劍を一振りずつ与えてこう詔した。

「今より、我が十握劍は天照大神御靈に加えて、倭王の神璽ともなった。皆は手許の鉄劍（これも十握劍と呼ぶ）に対して、饒速日に面するがごとく振舞え。ヒミコの鏡と同様、日々これに忠誠を誓え」

ここに、ヒミコの天（厳）之国王朝に代わって日本の倭王朝（日本王朝）が正式に始動した。この時の彼は、まだ三十歳に達していなかった。

ところが気ままに振舞う饒速日に対して、あちこちから轟々たる非難が湧き起こった。その後、役職を解かれた素戔鳴が控えていた。彼は都を抜け出て西播磨に身を寄せると、仏陀ゴータマと称して仏法による新しい国づくりを唱えていた。それが衆目を集めたところで、播磨の広峰山（姫路市）、摂津の平野や六甲山南麓（神戸市）、山城の東山（京都市）に隠れ潜む同志たちに檄を飛ばし、大倭へと向かわせた。その決死隊は北の奈良坂や西の大和川沿いから都に攻め込むほどに押しまくっていた。

同じ頃、素戔鳴に与する紀伊の熊らが挙げて紀ノ川沿いの山道を駆け上ってきた。これに呼応して、素戔鳴に仕えてきた三輪氏が立ち上がる気配を見せた。

対する饒速日方は大己貴軍を前面に出して素戔鳴方と対峙させたり、丹後海部家や摂津三嶋鴨勢を駆り出すなどして敵を押し潰しにかかったが、要の大日本軍が三輪本家に張り付いたままで二面作戦を強いられた。その間、天香語山率いる尾張海部家は都に大軍を送り込むやら、熊野・紀伊に攻め込むやらして父方に肩入れしていた。

双方による殺し合いは、周辺国に飛び火して拡大の一途を辿った結果、合わせて千余の戦死者が出る内乱に陥ってしまった。

またも天下を二分するかと思われたこの抗争も、張政の威圧めいた説得が効を奏したのか、全軍の統制がままならなかった饒速日が折れて出て、次の三点を確約することで漸く沈静化した。

一、ヒミコの遺言を遵守する。

一、天火明妃だった日葉酢姫ら五姉妹を妃に娶り、その児・五十瓊敷か大足彦を太子に立てる。

一、大己貴が卿に昇って、政を取り仕切る。

こうして、歳十三の豊鍬入姫（台与、トヨ）が晴れて二代目女王を襲名できた。ついで、日葉酢姫ら四姉妹が饒速日（三代目垂仁）に輿入れしてきた。この時の彼女は、四十歳に近かったろう。葛野の豪族・大筒木垂根（彦湯産隅の児）の屋敷でのんびり暮らしていたかぐや姫も、大日本家（月の国）に入籍した後、生まれ変わった風をして饒速日に嫁いできた。

身動きの取れなかった張政が、この結果を見届けてから帰国の準備にかかると、女王トヨは帯方郡までの厳重警護を申し出るとともに、魏帝にお礼の言葉を申し述べ大夫ら二十人の遣いも同行させた。

帰国した張政は、ヒミコの墓が魏帝の考えに沿った円壇と報告したことで、「倭人伝」には塚高さ（高・歩）の記載がない。

「卑弥呼以に死し、大いに冢を作る。径百余歩、殉葬する者、奴婢百余人。更に男王を立つるに、國中服せず。こもこも誅殺し、千余人を殺す。ヒミコの宗女、耆与（臺与、台与）、歳十三なるを立てて王と為し、國中ついに定まる。政等、檄を以て耆与を告諭し、耆与、倭の大夫率善中郎將掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ」

この直後、ヒミコの亡骸は生前から造っていたホケノ山古墳に戻された。それから半年もすると、円壇は石垣を五段に積み重ねた水濠付の円墳（五段目は石積み）に一変していた。饒速日はその墳頂を掘り下げてヒミコの棺を納めると、百面近い鏡・ツボ・特殊器台土器なども添えて弔った。

● 一都七道制

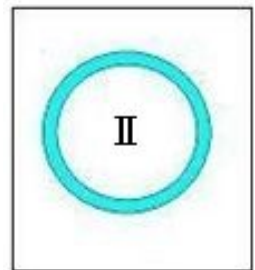
饒速日は御陵の件に通りのケリをつけると、大己貴に天下を治める国づくりを命じた。数ヶ月後、大己貴は主人やヒミコの意向を推し量りつつ、大神家と大日本家が結束して日本王朝を支える体制を立ち上げるや、自ら最高職に踏み留まっていた。

その天下の国づくりとは、畿内や大日本国（奈良盆地）を取り囲む形で、西海道・山陽道（西道）・山陰道（丹波道）・北陸道（越の道）・東山道・東海道（東の方の十二国）・南海道など七道に区分してそれぞれに都督（道主）を置き、連邦制のごとく統治することにあつた。

詳しく言うと、西海道には筑紫島全域が、山陽道には瀬戸内海沿いの播磨から長門までが、丹波道には山城・丹波・丹後から西方の日本海沿いが、北陸道には若狭から越国にかけてが組み込まれた。

東山道には近江・美濃・飛騨・信濃・甲斐・上野・下野など、また東海道には熊野東部・志摩・伊勢・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・上総・下総が編入された。南海道には四国・紀伊・熊野西部が割り当てられた。

この体制下で、大日本王孝靈が大倭都督を拝命して黒田（田原本町）に都を定めた。日子坐王とその兒・彦湯産隅は世襲のできる丹波道主となって丹後宮津に、饒速日の兒・天香語山も東海



道都督を拜命して大倭との国境（名張辺りか）に都していた。廃嫡の憂き目にあつた誉津別は、北陸道都督に昇つて若狭国氣比に住みついた。ついでトヨの兄・豊城入彦が東山道都督となつて、近江盆地の一角に都を構えた。都督の中には大日本王のごとく、饒速日を補佐して天皇と呼ばれる御仁もいた。

この頃になると、太子の候補は弟の方が有望になつてきた。孝靈の嫡子・孝元に養子入りした弟は、孝元実子で若くして逝つた太忍信の名を継ぐや、彦狭嶋（孝靈の養子）からみつちりと帝王教育を受けていた。それ故、大足彦とも彦太忍信とも呼ばれた。

その大足彦が遅ればせながら、南海道都督となつて紀伊国に赴任して行つた。彼はそこで、家主忍男武雄心も襲名すると、紀伊国造の菟道彦（珍彦）の妹・影姫を娶つて竹内宿禰をこしらえた。

「景行紀」、「活目入彦五十狭茅天皇の第三子なり。母の皇后をば日葉酢姫と曰す。」「三年春二月に紀伊国に幸して、群の神祇を祭祀らむとトうに、吉らず。家主忍男武雄心命を遣して祭らしむ。・・家主忍男武雄心命、住むこと九年あり。紀直の遠祖菟道彦が女影媛を娶りて、竹内宿禰を生ましむ。・・」

四年春二月、天皇、美濃に幸す。左右奏して言さく、『この国に佳人有り。弟媛と曰す』
☆「景行紀」の記事から推して、景行は家主忍男武雄心を襲名して、竹内宿禰をこしらえた
と見たが、どう思われるだろうか。

ついで饒速日は、母方の外戚で日向から共に天降つてきた溝クイ耳を三嶋鴨族の長に引き上げ、

攝津と播磨を任せきった。その後の溝クイ耳は、太田郷（高槻・茨木市）に豪華な館を建て並べ、並み居る高官らに三嶋流神国づくりを手ほどきしていた。饒速日も八重事代主も、その娘の館にせつせと通いつめた。結果、父親がどちらとも判別できない媛タタラ五十鈴媛が誕生した。のちに神武天皇の大妃となる姫だ。

同じ頃の日前では、火瓊瓊杵と木花開耶姫がヒミコの後を追いかけるようにして逝った。跡継の火火出見は大葬を済ませて日前を継ぐや、後見役として共に天降ってきた実母の狭穂姫、その義兄の狭穂彦を火瓊瓊杵夫妻に見立てながら孝行に勤しんでいた。

その後、火火出見は都城都島（都城市）に遷都して、そこも高千穂宮と呼んでいた。その名からは、「日神の嫡流として倭奴国王朝を再興し、高千穂宮での日神と高皇産霊の政を再現してみせる」という彼の意気込みが感じ取れる。この都には、妃の豊玉姫もいつしか入都していた。

この夫婦の長男として生まれたウ草葺不合は、がやふきあはず豊玉彦の次女・玉依姫たまよりと結婚して五瀬・稲飯・

みけいりの御毛入野の三皇子に恵まれた。そのまた後、この家族は狭野（宮崎県高原町）に移ったという。

二六〇年代前半、続いて第四子が生まれた。またも、男子だけが四人も続いた。石神（天照大神）の血も流れるこの皇子は、声も性格も石神にそっくりなことから、石神の再来と騒がれ、磐余彦いわれの名で呼ばれてきた。後に神武と諡される天皇だ。

その前後の二六三年、魏は蜀漢を滅ぼしたものの、二六五年になると、臣下の司馬氏が魏帝から国を譲り受ける形を装いつつ、晋なる国をうち立てた。

この混乱の最中に、新羅が百済の国土を再三侵した。百済王から救援をせつつかれたトヨと饒速日は、新羅や南鮮八国に攻め入り、その一部を百済王に返してやった。恩義を感じた百済王は、これを契機に日本の軍門に降って来て、

「これから先は、春秋ごとに貢ぎ物をお届けします」と、礼を重ねて忠誠を誓ってきた。

泰始二年（二六六年）、女王トヨは晋に至る道が確保できたことで、早々と使節を送れり。この時、トヨは三十歳くらいだったろう。

その冬十月に、仙人のいで立ちをした女王トヨの遣いが晋の都に参って貢物を献上した。どうやら、後漢も魏も晋も共に、倭国の使者を迎えるにあたって、郊祭する慣わしがあつたようだ。

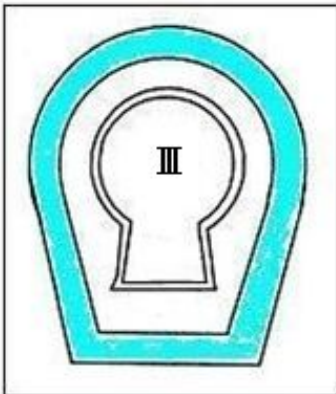
●天神火明饒速日

使節の帰国後、垂仁は天照国照彦火明饒速日と称して天神の位に昇る一方、大足彦が倭王の座に就いた。そこに至つた経緯は、こうだ。

「饒速日はヒミコの円墳を帆立貝形に造つて二重の水濠で囲うや、これを泰山・梁父山に見立てる中、柴を焚きながら封禅して現人神の天神に居座り、ついで天照大神之御魂の八咫鏡（以後、天照国照彦火明命）」と十握剣を天璽同然に祭り上げた。

その直後、垂仁は東山道都督に立つて間もない大足彦に倭王の座を譲ると伝えてきた。先例からすると、饒速日が天神として天地に君臨する一方、大足彦が倭王となつて地上の一切合財を取り仕切ることになるが、饒速日はそうはさせなかつた。祭器を独り占めにして政と軍事を一手に握つたまま、政権を移譲したごとく見せかけていた。

彼が政権を譲り渡した本心も、火火出見に命乞いまでした喧嘩沙汰を蒸し返し、大足彦に仇討ちさせることにあつた。



このため、大足彦は纏向に戻って日代宮^{ひしろ}で即位式に臨んだが、神璽も持たないままに立った。後に、景行と諡される天皇だ。この時の饒速日は四十代半ば、大足彦は三十代前半だったろう」

大足彦の後釜として、同門の成務が若年ながら東山道都督に昇り、大津高穴穗宮に都した。同じ頃、北陸道の誉津別が急逝したのか、仲哀が北陸道都督も兼ねつつ、行き来していた。

この時期の景行は、上は天神、下は都督に挟まれた窮屈な身にあっても、多くの妃に産ませた皇子や、妃の兄弟らを要職に取り立てることで、権力と武力をわが身に引き寄せていった。その影響は東国の地で著しかった。あおりを食らった日高見勢は、常陸を捨てて仙台平野に逃げ落ちたほどだ。

その後、饒速日は播磨国を山陽道から切り離して、針間国（加古郡以西）、針間鴨国（加西郡・加東郡）、明石国（明石郡）の三国に分かった上で、これに伊予大三島・吉備児島・淡路島など瀬戸内海島嶼や、伊予高縄半島もつけ足すことで針間海道を新設し、一都八道制に切り替えていた。と同時に、溝クイ耳の力では畿内を守り切れぬと見たのか、あるいは彼が急逝したのか、はたまた素戔嗚に加担した播磨勢を一掃しようと目論んだのか、摂津の小千族を揖保川沿いの太田郷にごっそり移して、針間海道を砦化する大構想に取り付かれていた。

この都督に抜擢された人物は、ほかならぬ摂津垂水郷（吹田市）に館を連ねる彦狭嶋だった。大足彦の教育係を全うした彼は、三嶋鴨家に移籍して溝クイ耳の跡継ぎに納まっていたが、都督に昇格するや明石郡東部に都して移ってきた。それ故、そこも垂水（神戸市垂水区）と呼ばれたわけだ。義兄弟の吉備津彦や稚武彦も共にやって来て、三国の国境を定める仕事でせわしく走り回っていた。

彦狭嶋が饒速日の恩義に報いる責務は、南国勢が攻め上ってきた際には、一命を賭してでも日

本朝を守り抜くこと、逆に西征に打って出る時は率先して総大将を引き受けることにあった。この状況下で播磨と伊予の要塞化が突貫工事で押し進められた。と同時に、彦狭嶋の児たちや、三嶋鴨族・小千族らが摂津や播磨から吉備児島・大三島・高縄半島へと繰り出して行った。

饒速日はこれも軌道に乗せると、一転して強気に出た。先の抗争で敵側に回った者らを東国や東北に追放して蝦夷と呼んで蔑んだり、敵方が慕ってきた素戔嗚を播磨の神出という片田舎に幽閉するなどした。素戔嗚はそこでひっそりと逝つたらしい。

二六〇年代末のあるとき、大足彦は饒速日名代と銘打って、加古水軍の訓練視察がてら東播磨にやって来た。かつて、彼は饒速日の側近から、

「播磨の稲日大郎姫（稚武彦の娘）は、まっこと麗しい姫君だ。彼女を妃に娶ったなら、天神から一段と目をかけられるでありましょう」と

と耳打ちされたことで、この機会に妃に迎えるつもりでいた。これを聞き知った姫は求婚を拒み続けて加古川河口の小島（高砂市辺り）に隠れ潜んだ。結局、姫は彼の熱意にほだされて島から出、加古川沿いの日岡（日岡神社の地）で、大碓・小碓の双生児を産むことになる。それは月足らずの難産だった。

その際、彼は無事な出産を願いつつ石臼を背負って歩き回っていたが、双生児が誕生したと知るや、臼を放り出して「コン畜生」と宣うたとされる。景行はこの一件で、長年の疑念が真実と悟つたらしい。その疑念というのは、後ほど明らかになる。

二七〇年代の前半、女王トヨが三十五歳で不治の病に取り付かれたことで、饒速日は同年代の妃だった倭迹迹日百襲姫（大日本王孝霊の姫、倭迹迹姫とも言った）を三代女王に引き上げた。

彼女は、聡明で先々の事がよく見通せた。その名は御炊屋姫・三炊屋姫・長スネ姫・活玉依姫な

ど、饒速日の妃ら百人余の名を片っ端から襲名したことがある。何ヶ月か後、この女王は饒速日に恥をかかせたとして逃げ去られ、失意の内に逝った。

すぐさま、女王付きの幼巫女・氣長足姫が四代女王に担がれた。

天照大神—天鹿兎山—日子坐王—大筒木真若王—迦邇米雷王—氣長宿禰

田道間守

氣長足姫

素戔鳴：天日槍—但馬モロスク—但馬ヒネ—但馬ヒナラキ—但馬ヒタカ—高額姫

倭女王 ヒミコ：(初代) 豊鍬入姫：(二代) 倭迹迹日百襲姫：(三代) 神功：(四代) 倭(迹迹)姫 (五代)

倭迹迹日百襲姫 (倭迹迹姫ら百人の妃の名を襲名)

吉備津彦 (五十狭芹彦)

日子宿間 (彦狭嶋)

彦狭嶋 (天火明の孫、豊城入彦の兄、彦狭嶋襲名)

稚武彦

孝安—孝靈

孝元

開化

彦太忍信 (…大足彦)

五十瓊敷 (天火明の兄)

大足彦 (天火明の兄、彦太忍信襲名、景行)

倭姫 (天火明の娘)

この姫はわずか数歳だったにもかかわらず、ヒミコとしてケナ氣に振舞っていた。饒速日が彼女に目をつけたには、理由があった。

幼いながら聡明で稀に見る美顔だった上に、日子坐王・天日槍双方の血を受け継ぐからだ。彼はこの血筋を利用して両海部家を取り込む一方、紀伊熊野家を通じて新羅や熊襲も押さえつけたいと目論んでいた。

その後、饒速日（日本大物主大神）はヒミコの墓の方墳を伸長してバチ形前方後円墳に造り変えようと、倭迹迹日百襲姫もそこに合葬した。

ついで仏塔になぞらえたのか、方墳の表面全体を大坂山から運んだ石ですっぽり覆わせていた。このとき、ヒミコの墓は五壇重ねの石積み円墳の一角に、方墳を付け足したバチ形前方後円墳に変貌して二重の周濠で囲われていた。

●太子磐余彦

数年後、十数歳になった磐余彦は、高千穂峰近くの狭野（高原町）で遊び盛りの毎日を送っていた。その後は、高千穂宮（都城市）に移った。

その二、三年後、歳五十に近づいた火火出見は、鹿児島湾の奥に遷都して、そこも高千穂宮と呼んでいた。そこには今、鹿児島神宮が鎮座する。

彼は過去の苦い体験から、これまで太子を決めずに来た。その彼も余命を悟ったのか、太子の選定を急ぎ出した。その候補と目される皇子たちの中で、石神の再来と騒がれ、しかも知恵も勇気も備える磐余彦が目立っていた。この時、磐余彦は海神の娘、吾平津姫あひらつを娶った身ながら、油津（日南市）から日ごと馬に乗って遠駆けする気楽な日々を送っていた。

火火出見はここに至って、「日前を託せる皇子は、この孫でしかない」と英断すると、すぐさま磐余彦を召し出し、日前鏡と天璽（天鹿兎弓・羽羽矢）を前にして、問いただした。

「この二つの祭器に対して、火瓊瓊杵と火火出見の願いを実現したいと思わぬか」

